

2014年  
1月7日  
火曜日

「アベノミクス」の影響もあつてか、二〇一三年のクリスマス商戦や百貨店の売り上げは大きく伸びていると報道され、一〇〇万〜二〇〇万といった高級な腕時計も売れるようになって、日本の景気が回復を見せているとの見解も多くみられ、「バブル景気」再来の兆しもあるとさえ言われる。一九八六年十二月から一九九一年二月にいたる五十一ヶ月にも及んだ「バブル景気」は、日本社会が株式と不動産を中心に経済「発展」を目指した時期と言われ、そのために両者共に信じがたい高値となった時期でもある。株式では一九八九年十二月に日経平均株価が三八、九一五円という最高値をつけ、バブル景気の一翼を担った不動産にいたっては、その絶頂期、東京山手線内の土地総額でアメリカ全土を買うことができたと言われるまでに高騰した。こうしたことからみて、

舟木 讓 教授（宗教哲学・キリスト教学）

# 経済と倫理 『バブル景気』再来？

その景気や経済活動が尋常でなかったことはうかがい知れる。

しかし現在、将来の経済を担う中心となる大学生も含めた若い世代は、日本でのバブル景気がはじけて以降に生まれた世代であり、そうした景気の中にあつた当時の日本社会の様子や、好景気を背景にした浪費を伴う若者文化はそうした人々にとっては、想像を遙かに超えていると言えよう。一方、当時のバブル景気の中で「豊かさ」を経験した世代の中には、その再来を期待する人々も存在するかもしれない。

既述のようにバブル景気は、「強く」「豊かな」日本を実感できた時代であり、そのためその再来を望む者も少なからずあると思われるが、当時その背後で行われていた「地上げ」と呼ばれる活動に象徴される負の側面を私たちは決して忘れてはならない。ここでいう「地上げ」と

は、不動産がまさに秒単位で高騰して行く一方、その売買の対象となる土地は当然限られるため、お金や脅しによって目的の土地に居住する人々を追いついていく行為のことを指す。特に不動産「価値」があるとされる町の中心部に近い土地は言い値で売れる状態が続いたためその取得に血眼になった人々が数多く存在したのである。

しかし、この時忘れられた、そして決して忘れてはならなかったとても大切なものがあつた。それはその町で生活している人々の存在である。私たちが生活するとき、その生活空間のあらゆるものに囲まれて日常を営んでいる。町の風景、匂い、

音、季節の移ろい、そして何よりも日々出会う人々等々。私たちは意識せずとも通常限らない多くの存在に囲まれ、また出会って思い出を積み重ねながら日々生活しているのでは

る。そして、その当たり前の日常を守るために多くの人々は、汗水垂らし、家族のため、社会のために働きそのいのちを削っているのが現実である。しかし、バブルに踊りそのかけがえのなさが見えなくなった多くの人々は、例えば「地上げ」という行為でその日常を「暴力的に」破壊しつつしたのであつた。札束をちらつかせて地域の関係をずたずたにし、町の風景を壊して二度と回復しないような状況にし、人々の思い出を粉々にして私腹を肥やすことに邁進した人々が数多く存在したという現実がバブル景気を支えた背後にあつたのである。

経済的豊かさは重要であるが、それを支える人々の生活といのちの存在を忘れたとき、私たちは最も大切なものを喪失していることに気づくことが肝要であると言えよう。 ■